原野ニ自生アリ、根ハ冬モ枯レズ、春宿根ヨリ苗ヲ生ズ、莖方ニシテ葉對生ス、形圓カニシテ淺キ鋸齒アリ、面ハ深綠色、背ハ紫色ナリ、稍長ズレバ綠色ニ變ジ、形長クナル、斷レバ香氣多シ、秋ニ至テ高サ二三尺、葉間ゴトニ節ヲ圍ミテ、碎小花ヲ叢簇ス、色白シテ微紫ヲ帶ブ、藥鋪ニ貨ルモノ和產ノミ、舶來ナシ、城州山城ノ鄕、和州奈良、泉州堺ニ多ク栽出ス、一種小葉ノモノアリ、ヒメメグサト呼ブ、一名コハツカ、微ク香氣アリ、是石薄荷ナリ、一種細葉ノモノアリ、葉濶サ三分、長サ寸餘ニシテ鋸齒アリ、越中ニテハクサト呼ブ、

增、天保十年ノ頃、阿蘭陀種ノ薄荷舶來ス、形容尋常ノ者ニ似テ、肥大ニシテ葉ニ皺文多シ、ソノ氣甚猛烈ニシテ惡臭ヲ帶ブ、葉ニ蔕ナクシテ直ニ莖ニ對生ス、尋常ノ薄荷ノ葉蔕五六分ナルニ異ナリ、移シ栽テ繁茂シ易シ、故ニ今處處ニ多シ、

〔廣益地錦抄六〕薄荷（はつか）　宿根より春生、又たねを蒔てよくはへ出、はやく玄げる、葉形は藿香（くわくかう）に似て兩對に付、葉のまハりにあらくきざあり、葉の間々より枝多く出る、葉末に花さく、うす白く小細見るにたらず、葉莖に香氣有、少しつまみ切れば、香鼻をとほる、又野薄荷（ノハツカ）ハ葉ほそながくして、へりに鋸のきざみもなく香氣あり、宿根より多ク生ル、本庄邊に生るは眞土（マツチ）ゆへにや、香氣甚しく龍薄荷にまされり、兩種ともに花壇に植べし、眼目かゆくむつかしきに、葉をはりてよし、あきらかにしてすゞしむ、又たばこにきざみ入れて用、口中をすゞしむ、

〔農業全書十藥種之類〕薄荷

薄荷是も藥に多く用ゆる物なり、作るべし、二種あり、一色はりうはくかとて、氣味のよきあり、是をうゆべし、又ひはくかと云あり、あしゝ、作るべからず、肥地に一度うへをけば、年々自ら生る物なり、たねを取をき、苗にしてもうゆべし、畦作りしうゆる事、菜にかはる事なし、刈時分は小むぎかるころ、下葉色付を、日和を見て刈取、うすくあみて一日ほし、其後日かげにつりて、かげ干にし